

問題でなく、ただ、卓球界にその名を轟かす荻村伊智朗氏の出身校ということだけで十分だった。夏の暑い盛り、西高の広さと樹々の美しさに唯々驚きながら受験、即日発表の結果、見事合格できたのであった。

西高では、良きライバルに恵まれ、洗練された東京の卓球の中でもまれ、強くなつていった。堀越、高輪等の私立高とも全く互角の戦いをした。そして、一浪して東大に入学し、現在では、卓球部主将として、張切つて日夜卓球に励んでいる。これ以上充実した生活もあるまい、とまで思っている毎日である。もし、あの日、早大学院に合格していたら……と思うと。本当に、落ちてよかつた。

これからも、人生には、数多くの苦しみ、悲しみが、小生を待ち受けていることだろう。しかし、その中のいくつかは、至上の喜びが、姿をかえて、小生を訪れているのかもしれない。いや、すべての苦痛とは、そんなものなのかもしれない。

以上、思いつくままに、青春の思い出を書き記してきました。読み返してみると、かなり意識的な手前味噌の箇所が数々見られ、思わず赤面してしまいますが、一卓球馬鹿の、ある意味では妥協の記録として読んでいただきたいと思ひます。

最後に、西卓会の益々の発展を願つてやまない小生の気持ちを記して、終わりたいします。

雑感

二十六期生 刈谷 方俊

私の期間中には、西高の現体育館の完成があり、それに伴う記念行事の一環として、卓球のエキジビション・マッチが行なわれました。これは、荻村先輩にお骨折りいただき、全日本級の田阪さんや、古川さん、女子では山中さん御姉妹を招待して、模範試合をしていたものです。後半には、部の近光、庄司両先輩との試合も交え、かなり盛りあがったと記憶しています。

練習の方に話を移しますと、体育館完成前は、廊下に台を縦に四台並べて練習場とし、やはり狭苦しい思いをしました。が、球拾いは楽でした。この時期は、上級生が、技術的にも精神的にも充実し、部全体にもいいムードがあったように思います。事実、上級生を中心として、各大会にもかなりの成績を残しました。例えば、近光先輩は全日本ジュニア、インターハイの代表に、庄司先輩は関東大会の代表になったので

新しい体育館に移つてからは、広さに関しては比較的良く

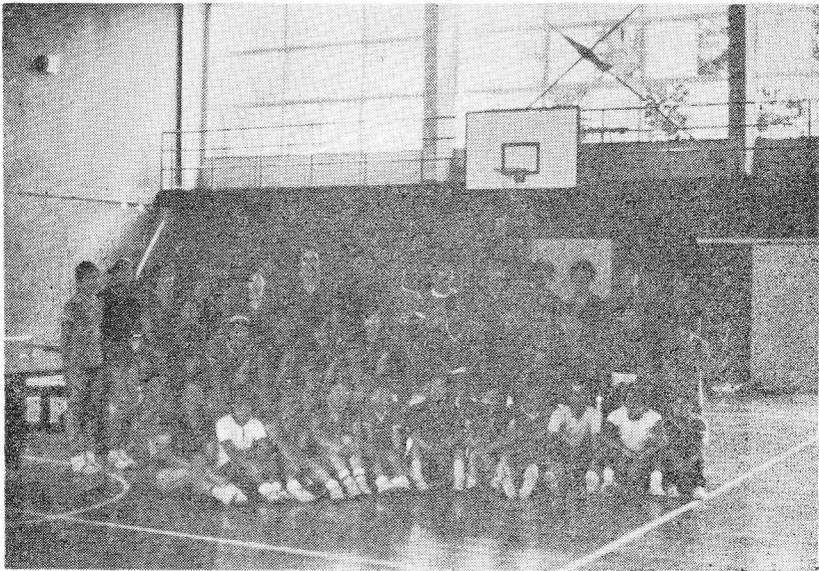
なりましたが、今度は、他のクラブと練習時間の取りあいとなり、以前よりはるかに制限されてしまいました。土曜日も、午後全部練習することができず、まとまった練習ができなくなりました。

また、体育館完成は、学年の変わり目にもあたり、新入生を加え、部の中心も我々の年代に移りました。しかし、全体的に、やる気に満ち満ちたというわけにいかず、今一つ盛り上がり欠けたと思われるのは、私の努力不足のためと大いに反省するところです。

夏の合宿も例年どおり行なわれましたが、今思い出すのは、暑く苦しかったことより、ある部員がさる歌を歌って、先生にひどくおこられたことや、最後のコンパで騒いだことなどです。

いろいろ反省もありますが、今はただ、変わった連中が、技術はどうあれ、自分なりに真剣に卓球に取り組んだ、一つの有意義な時期だったと思います。

また、全体を通じて、常に、吉田さん、瀬戸さんには、いっしょに汗を流しながらいろいろとお世話になり、卓球部はいい先輩に恵まれたところだ、と感謝したものです。



▲ 現在の体育館（昭和47年撮影）